前橋文学館報

萩原朔太郎記念　水と緑と詩のまち

No.1 1995.3

寄稿

川のある町

文学館の前を流れる広瀬川をはじめて見たとき、反射的に島根県の松江の風景に似ているなと思った。川にかかる可愛らしい橋が、そんな連想を呼んだのである。

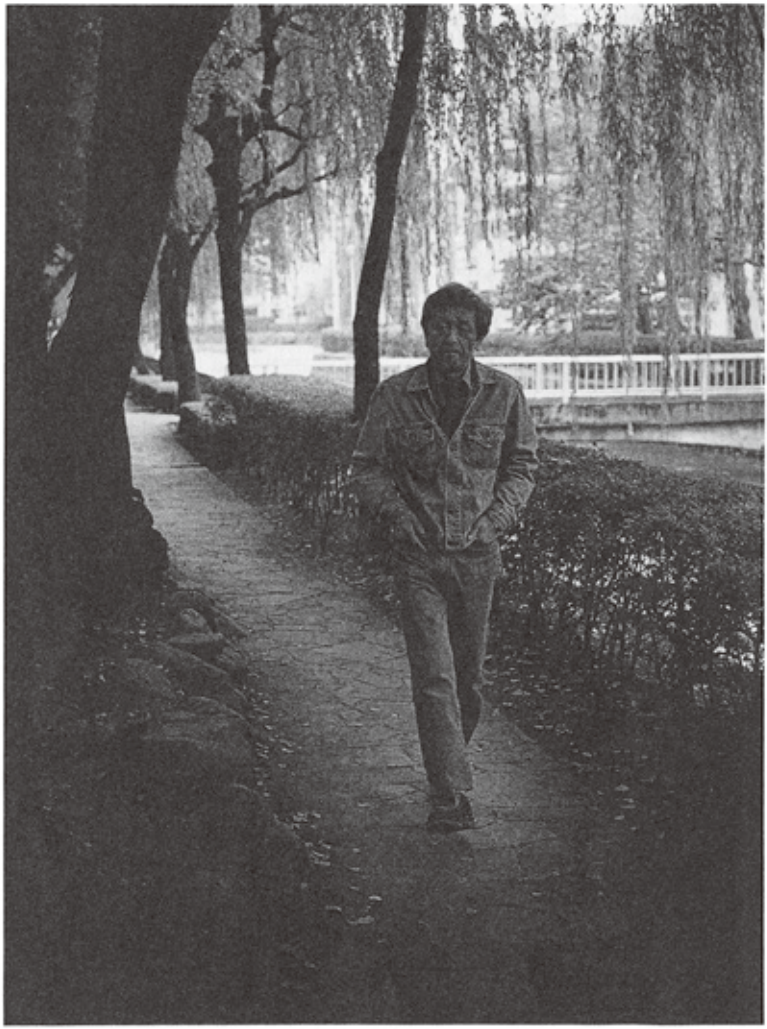
といっても、本当に似ているのかどうかと問われると、確信はもてない。なにしろ松江の町に行ったのは、かれこれ四半世紀前にもなろうかという昔のことだし、町にいたのは夕暮れどきから三時間ほどの短い間でしかなかったからだ。川幅も違うかもしれないし、水流も広瀬川よりゆるやかだったような気もする。ただ、かけられてあった小さな橋のシルエットの印象が、朔太郎橋と二重写しになったということだ。

「広瀬川はいいねえ。思ったより水かさが多く、流れが早い」とは、昨夏はじめて文学館を訪れた辻征夫の弁だが、川のある町は、それだけで人の心を清々しくさせてくれる。

松江には「幼稚園」という雑誌の仕事で、カメラの相原亨といっしょに行った。取材したのはH君という右手に障害を持つ子供で、その子がハンデにもめげず、サッカーに打ち込み明るい姿をレポートするという企画だった。記事のほとんどはお母さんの談話でまとめたのだが、そばにちょこんと坐っていたH君と私とは、どういうわけか年齢差を越えて波長があい、何か別れがたいものを感じるほどだった。私はレポートのタイトルに迷わず「左手だって勝てるんだ」とつけた。

その後のH君とは、最初のうちはお母さんを通じて、何年か経ってからは直接に本人と年賀状のやりとりをしてきた。しかし、はじめの頃こそ快活な内容だった彼の年賀状は、年を経るごとに明るさを失っていくというふうに感じられた。そして、今年はついに途切れてしまった。

あの川のある町で、大人になった彼の心にはどういうことが起きているのか。知る由もないけれど、今年からは広瀬川を見るたびに明るい子だったH君のことを思いだすことになる。



撮影・平山利男

清水哲男

●しみず てつお

昭和13年(1938)東京生まれ。京都大学在学中の昭和38年、第一詩集『喝采』を発表。卒業後、河出書房などの編集者、FM東京のパーソナリティーなどを経て現在にいたる。昭和49年『水甕座の水』で第25回H氏賞受賞。平成6年(1994)、9年ぶりの詩集『夕陽に赤い帆』で第2回萩原朔太郎賞受賞。